早稲田大学図書館所蔵浅井真男関係資料目録
―アーカイブズ教育の一環として―

和田　敦彦・伊藤かおり・柿原　和宏
岸川俊太郎・坂下　智昭・中野　綾子
森田　三咲

1　資料，及び調査に関して

本論は，早稲田大学図書館に寄贈されていた浅井真男関係資料全体の目録と，そこに含まれるいくつかの資料の翻刻，解説である。浅井真男については後述するが，ドイツ文学者，翻訳者であり，ニーチェやキルケゴールの翻訳・紹介で著名な人物である。

資料の整理，目録作成作業は，早稲田大学大学院における教育プログラムの一環として行っている。アーカイブズ，すなわち記録史料学の方法，実践を，文学の研究，教育の中に組み込んでいくための試行的な試みでもある。様々な形態の一次資料を整理し，保存，公開していく手立てについて学ぶことは，日本文学研究のみならず，広く人文科学研究の研究において有用なことは言うまでもない。

ただ，ここではそれを単に研究や調査スキルとして考えているのではない。資料の存在を知り，それを保存，整理し，読者に向けて公開していくプロセスを学ぶことには，単なる資料解説にとどまらない価値がある。それまで埋もれていた資料や情報を，整理し，活字化し，書物として現在の，そして未来の読者に届けていく。このプロセスを実践していくことは，同時に書物が読者に届く仕組みを学び，考えていく有効な手立てともなる。そのため，書物や読者の歴史を学び，研究するための重要な教育方法としても私自身は位置づけている[1]。

こうした観点から 2008 年度より早稲田大学図書館に協力をあおぎ，同図書館の特別資料室所蔵の未整理資料を対象として大学院の授業の中で整理を行い，目録化，公開していく試みを始めた。早稲田大学図書館特別資料室からは研修室の利用と，未整理資料の提供，保存用装備やアドバイスを受け，それをもとに，院生達は箱詰めの未整理資料を整理，保存，目録化，翻刻作成，その成果の印刷，公開という一連の作業を行うこととなる。これまでに田口卯吉関係資料，及び岡村真盾関係資料の整理を行ってきた[2]。今回の浅井真男関係資料の調査は 2012 年度から開始し，2013 年度いっぱいで目録作成を終了，本稿で目録の公開と，資料の翻刻，解説を行うこととなった。翻刻，

解説は伊藤かおり，柿原和宏，岸川俊太郎，坂下智明，中野綾子，森田三咲が担当した。また，それ以外に整理，目録作成には，大熊達也，小林雄佑，柴田希，柳澤花七絵が参加している。本節，及び全体のとりまとめを和田が行い，各解説の執筆担当はそれぞれの解説部分の後に記した。

さて，今回整理にあたったのは浅井真男関係資料である。浅井真男は 1905（明治 38）年 1 月 6 日，東京都品川区（当時は東京府荏原郡）に生まれ，東京市芝中学校を卒業，1929（昭和 4）年には早稲田大学文学部（独逸文学専攻）に入学，卒業後は早稲田大学第一高等学院で非常勤の職につき，ドイツ哲学，文学について研究や翻訳を続けていた。1934 年には同人雑誌『伝説』の編集を，1936 年からは文芸雑誌『文学精神』に参加，青木真二のペンネームで評論，翻訳，小説を発表していた。1941 年には早稲田大学第一高等学院の教授職につき，終戦の年の 1945 年に早稲田大学文学部の臨時講師，1949 年に同教授となった。1975 年に退職するまで，白水社の『シュヴァイツァー著作集』や『キルケゴール著作集』，『ニーチェ全集』，河出書房の『ヘルダーリン全集』等を通して，数多くの著名な訳書を刊行し，関連した随筆や評論も発表していく。1975 年に早稲田大学を定年退職した後も執筆活動は続き，この時期に歌舞伎についての劇評の連載を行ってもいる。1987 年死去。

早稲田大学に寄贈された浅井真男関係資料には，上記の浅井のすべての活動にわたる多様な資料が含まれている。翻訳の草稿，校正ゲラはもちろんのこと，若き日に編集にあたっていた同人誌や，そこに発表していた評論，小説の原稿，定年後に連載していた歌舞伎についての劇評のゲラも含まれる。また，戦前から晩年まで，数多く残されている書簡の中には同時代の作家，訳者，編集者からの書簡も少なくない。

これら具体的な資料の解説，翻刻の詳細については以降の論で触れられることとなるので，ここでは，浅井真男関係資料の，資料体としての意味，意義について最後に少しふれておきたい。ニーチェであれ，ゲーテであれ，誰しもよく知っている著名な哲学者，作家についての資料は，誰しもが重要視するし，保管もするが，その紹介者や翻訳者となるとどうだろうか。作者について評価することは自明のこととされてはいるが，その翻訳者や解説者，紹介者はややもすれば二次的な存在として，研究の対象からはずれてしまう。だが，翻訳や紹介という行為は，それ自体創作と同等の表現の営みであることはもちろん，もととなった書物と読者とをつなぐ重要な行為なのである。書物と読者の間にあって，それらをつないでいく行為は翻訳であれ，紹介であれ，あるいは書物の広報や物理的な輸送，展示であれ，見過ごされてしまいがちではあるが，読者への表現や思想の広がりをとらえ，考えていくうえで，重要な役割がそこにはある。翻訳者についての関係資料の収集，保存，提供は，こうした観点から，改めて重視していくべきであろう。

なお，紙幅の都合上，7 箱のうち箱番号 1 ～ 3 の目録のみを紙上に掲げ，箱 4 から 7 を含めた目録全体についてはウェブ上にて公開する形をとっている[3]。

（和田敦彦）

2　翻刻，及び解説

正宗白鳥書簡（図 1）

〈本文翻刻〉
1935（昭和 10）年 4 月 21 日
中野区野方町一ノ七一五　浅野眞男様

御近著「ニイチエ」御寄贈被下，右お礼申上候
正宗白鳥

谷川徹三書簡（図 2）

〈本文翻刻〉
1935（昭和 10）年 4 月 21 日
中野区野方町一ノ七一五　浅野眞男様

御譯著お送りいただき有難う存じました
いい本をお訳しになって私などにも有難く存ぜられます
　四月二十一日
谷川徹三

和辻哲郎書簡（図 3）

〈本文翻刻〉
1935（昭和 10）年 4 月 21 日（消印 4 月 22 日）
中野区野方町一ノ七一五　浅井眞男様

前略　貴訳ベルトラムのニイチェ唯今拝受難有御禮申上げます。又このやうな御事業をお仕上げになつた事に對し心からお喜び申上げます　　不取敢御禮のみ
　四月廿一日　　和辻哲郎

三木清書簡（図 4）

〈本文翻刻〉

1935（昭和 10）年 4 月 22 日　［推定］

中野区野方町一ノ七一五　浅井眞男様

杉並区　阿佐ヶ谷一ノ八六八　三木清

拝啓，このたびはベルトラムのニイチエを御譯成，早速御恵投にあづかり，まことに有難く，厚く御礼申し上げます。ベルトラムの書は私もいろ〳〵教を受けたものでありまして，ニイチエに關する文献のうち最上のものに属すると信じます。いまこの書が我が國に紹介されることになりました（ママ）について，貴下の御努力に對して敬意を表します。なほ下巻の速く出ますのを祈つてゐます。

右取敢へず御礼まで。

四月二十二日，　清

浅井眞男様

〈解説〉

ここに紹介する書簡 4 通は，浅井真男が自ら翻訳し，1935（昭和 10）年に刊行した『ニイチェ一神話の試み　上巻』[4] の献本に対する礼状である。書簡の送り主は正宗白鳥，谷川徹三，和辻哲郎，三木清。いずれも当時の文壇，論壇を代表する小説家，批評家，哲学者であり，ここからは浅井真男の交流圏の一端を窺うことができる。

同書の原著者であるエルンスト・ベルトラム Ernst Bertram（1884–1957）は，ドイツの詩人，文学史家で，詩人シュテファン・ゲオルゲを中心に結成された芸術家グループ，ゲオルゲ派に属した。翻訳の原作 Nietzsche, Versucheiner Mythologie（1918）はニーチェ論の記念碑的作品として話題となった評論である（浅井の訳は 1929 年に刊行された増補第 7 版に拠る）。

同書は，その「訳者緒言」に「下巻は出来る限り速かに公刊する予定である」と記されるように，上下巻の前半部分として刊行されたが，版元の事情により下巻の出版は実現をみなかった。しかし，その後，1941（昭和 16）年 11 月に筑摩書房から『ニーチェ――神話の試み―』の題で 1 巻本として刊行される。筑摩書房版の「訳者後記」には，その経緯が次のように述べられている。「本書の前半に当る部分は数年前刊行したが，発行書店の都合で廃刊となり，後半の続刊も不可能となつた。訳者は当時の読者に対して心苦しく思ひながらも，この事情を利用して翻訳の徹底的な検討と修正を行ひ，少しでも整つた形でこの書を世に送ることを義務と考へて来た」。

4 通の書簡は，上巻のみの出版に終わった木村書店版への礼状であるが，このうち三木清書簡の年次を推定とした理由を記しておきたい。封筒 1 点と書状 1 枚よりなる三木の書簡は，封筒の切手部分が切り取られているため消印が不明である。しかし，上述した訳書の経緯を踏まえると，「下

巻の速く出ますのを祈つてゐます」という文中の記述から，三木が受け取ったベルトラムの訳本が木村書店版であったことがわかる。書簡の年次を 1935 年と推定した所以である。

三木清は，当時論壇で注目を集めていた知識人の一人であるが，礼状のなかで同書を「ニイチエに關する文献のうち最上のもの」と評している点は興味深い。この点については，浅井自身も木村書店版の「訳者諸言」で，「原著は文学・歴史研究法に決定的な転回と新しき光明を齎したと云ふ点でも，従来あらゆる誤解・無理解に委ねられてゐたニイチェを初めて統一ある形姿として，偉大なる人間像として示したと云ふ点でも，既に一般に十分価値を認められ，又，学界に有力な影響力を及ぼしつゝあるもの」と述べている。「いい本をお訳しになって私などにも有難く存ぜられます」という谷川徹三の言葉も含めて，一冊の翻訳書をめぐって結ばれる一連の書簡は，同書の同時代的意味を考える上で貴重な手掛かりの一つとなるはずである。

（翻刻・解説　岸川俊太郎）

小説「復讐者」草稿（図 5）

〈解説〉

小説「復讐者」は，浅井真男が自ら編集を務める同人誌『伝説』（木村有隣堂書店，1934 年）において発表された。略年譜によれば，浅井が『伝説』の編集に携わったのは 1934 年の 1 月から 12 月にかけてであり，今回調査した資料のなかに確認できた『伝説』は，一巻二号（1934 年 3 月 15 日），一巻三号（1934 年 5 月 20 日），一巻四号（1934 年 7 月 15 日）の三冊である。また「復讐者」の草稿類は，七点ほど確認できた。

三冊ある『伝説』のうち「復讐者」が掲載されているのは，連載第一回目となる一巻二号と，「（承前）」として掲載された一巻三号である。三号に掲載された「復讐者」の末尾には「（未完）」の文字が記されており，まだ連載が続くことが示唆されている。しかし同人誌『伝説』は管見の限り，国立国会図書館や国文学研究資料館といった主要機関にも所蔵がなく，今回調査した資料の他には，早稲田大学図書館に一巻二号，四号，五号（1934 年 10 月 3 日）の所蔵があるのみである。『伝説』一巻五号には「復讐者」の掲載はないため，一巻二号・三号の掲載からうかがえる範囲で，小説「復讐者」について紹介したい。

物語は，花柳界の家に生まれた松田圭助の幼少時代から始まる。店で働く芸者や板前，馴染客に愛されながら育った圭助は，小学校の上級学年になる頃には家業に対する引け目や羞恥を覚えるようになっていた。自らが生まれながらに背負う運命を忘れるために，圭助は学業や読書に没頭していくようになる。

家業への引け目は次第に両親への反撥となるが，それはかつて店で働いていた美代という女の妹・保江との恋愛を反対されたことで，より決定的なものとなる。そのような折に「肺門淋巴腺炎」という病気にかかった圭助は，親の庇護なしには生きていけない自らのふがいなさに打ちひしがれ

るのであった。

家と父の相克，恋愛，病というありふれたモチーフのなかにも，浅井が日本の文学に不満を感じていたことがうかがえる箇所がある。

> その頃読書界には感傷的な基督教気分が流行してゐた。強健な宗教的情操の不足を涙に満ちた哀訴刺戟的な感動詞で補つてゐる似而非人道主義である。倉田百三や有馬武郎が高踏的な身振で卑俗な人生苦悩の歌を唱つて，何も知らない青年たちを誘惑した。（一巻二号）

圭助もまた，こうした小説の世界に誘惑された青年の一人であったが，それらの物語に描かれる人物たちのようには「美しく悩むことができない」青年として設定されている。「表現に於ては，生きることが直ちに死することであり，同時に死することが直ちに生きることである」（一巻二号）という言葉を巻頭言に掲げた浅井真男にとって，当時の日本文学は「小奇麗な苦悩」をしか描かないものと映ったようだ。文学史にその名を残すことはなかったものの，小説「復讐者」は，ドイツ文学者から見た日本文学という観点がうかがえる資料といえるだろう。

（解説　森田三咲）

唐木順三書簡（図 6）

〈本文翻刻〉
1943（昭和 18）年 12 月 20 ［推定］
東京都中野区鷺ノ宮
一ノ六〇九
浅井真男様
神奈川県高座群人私付
南林間都市
十二月二十日
唐木順三

御葉書と雑誌「明治文学」六号拝受いたしました。
実はさきほど外出から帰り，タラワ島玉砕の報道に座を正し，昂奮した頭のまま，雑誌所載の貴兄の論文を卒読いたしたところです。途中から，これは，こんなにあわてゝ読んでも解らぬぞ，と思ひながらもとにかく眼だけは終りまで通しました。私には，なれない文章ですので，あつさりと頭には入りかねます。ただ，これは鴎外論中で容易ならぬものだと感じました。
拙著「鷗外の精神」は要するに精神史で，鷗外の「内」へもぐりこんで行つたものにすぎません。いまの私にはそれが精々で，とても外から「鷗外の世界」を書くほどにいろいろの点で熟してをり

ません。然し,「独逸日記」を読んだときは，外から扱つてみたいといふ一種の誘惑は感じましたが。貴兄の「青春」と「あそび」と「愛」の説は非情に面白いと存じます。恐らく，もう十年もたつて，私が「世界」を書く場合が若しあれば，――これはありさうに思ふのですが，――恐らく右の三つのものを借用するのではないかと存じました。私は鷗外の世界と明治の精神史とを結びつけて一度は書きたいと思わぬこともないのですが，何時のことかわかりません。
その中に貴説を再読，精読の機がありましたなら，その時また書きます。とにかく非常に多くの問題を含んでゐる論文と思ひます。先は右一筆いたします。

十二月二十日

唐木順三

浅井真男様

〈解説〉

唐木順三から浅井真男に宛てた書簡。封筒 1 点と書状 1 点よりなる。封筒の消印は不鮮明で読み取れないが，冒頭でタラワ島での戦況にふれていることなどから，書簡は 1943（昭和 18）年 12 月 20 日付けのものと思われる。封筒の表書きには,「東京都中野区鶯ノ宮一ノ六〇九浅井真男様」とあり，裏には「神奈川県高座群人私付南林間都市十二月二十日唐木順三」のほか,「4980.62990」というメモが記載されている。

唐木順三（1904–1980）は日本の中世仏教研究や近代文学研究で知られる評論家であり，哲学者である。京都大学哲学科に学び，西田幾多郎や三木清の影響を受けた。1940（昭和 15）年には，古田晁や臼井吉見，中村光夫らとともに筑摩書房の顧問となり，戦後は同社の雑誌『展望』の編集に携わった。1943（昭和 18）年 9 月に刊行された『鷗外の精神』は,「鷗外精神史」と「鷗外雑記」の二部構成になっている。その内容は,「鷗外を支へ，やがて日本を支へて来た精神の一具体面」を提示するものである。鷗外の思想の変遷を辿ることで,「近代日本を支へて来たものは何であつたか」と問う唐木の文明論的関心が示されている。

本書簡は，この『鷗外の精神』を著した唐木が，浅井の論文「鷗外の世界」[5] について感想を寄せたものである。浅井は論文中,「生活感情」に即した「生きられた（……）青春の再現」を実践した数少ない作家として，森鷗外を挙げている。「舞姫」における「まことの我」の発見から,「普請中」や「かのやうに」などの明治期末以降に発表された小説にいたるまで，異なった条件の下に立ち現われてくる青春の緊張関係―「人生的意義」と「冷ややかな抑制」との対立―の系譜を新たに見出している。

この論文について，唐木は「鷗外論中で容易ならぬもの」と評し，自著の『鷗外の精神』は「鷗外の「内」へもぐりこんで」書いたものにすぎないとふり返っている。浅井が「旧日本文化と西洋文化との対置の只中」にあった知識人として鷗外に注目する以上に，両文化の対置を「自己の生活の一段階」として客観化し，自分自身の「生命の問題」として描いたことに注目すべきだと主張し

た点は，唐木の関心と重なりながらも，その先をゆくものといえる。唐木が鷗外の精神史を辿ることで，時代の精神を浮かび上がらせようとしたのに対し，浅井は唐木以上に鷗外の内的問題に踏み込むことで，かえって時代の精神の要求の下で「如何に身を処するか」，「如何に生きるか」という生々しい根本問題に迫っている。その具体的な現れとして持ち出されるのが，鷗外の「あそび」の観念である。

浅井は明治40年代の鷗外の「厳粛な諦め」の姿勢に連なるものとして，この「あそび」の態度を「自己保存の身振り」と評し，自らの相対的表象にすぎない他者の前に，あえて同等者として「我」を立たせることを「愛」と評した。それは，「サフラン」（大正3）における「サフランと私との間」に見出す「接触点」であり，「外物を独自な生存として愛する」態度である。論文中で使用される概念の定義や主張の根拠が曖昧なまま論が展開していく部分があり，唐木が関心を示した「「青春」と「あそび」と「愛」の説」の連関ははっきりとしないが，この論文との出会いが，唐木の「鷗外の世界と明治の精神史とを結びつけて」書きたいという欲求に拍車をかけたことが本書簡からうかがえる。

唐木はのちに『森鷗外』[6]を刊行しているが，『鷗外の精神』に比べ，鷗外への共感よりも批判的な調子が強くなっている。特に，末尾の一章である『礼儀小言』についての考察は，〈「型」の喪失〉など，『現代史への試み』[7]で追究された文明批評に連なるものである。『鷗外の精神』から『森鷗外』までに生じた唐木の研究姿勢や問題意識の転換をうかがうことができる資料である。

（翻刻・解説　伊藤かおり）

『芸術』執筆依頼（図7）

〈本文翻刻〉

神奈川県葉山久留和一六五七　浅井真男様

東京都杉並区阿佐谷三丁目五一一番地株式会社　八雲書店電話荻窪三六二五番新庄嘉章

謹啓

終戦以来四ヶ月余，私達の周囲を取巻いてゐるものはすべて暗闇と悲惨，今更ながらに敗戦の憂目を痛感さすものばかりであります。前途もまた，決して楽観を許さぬ問題山積して，多事多難な荊棘の道が予想され暗澹たる気持が致します。ただ，戦争中私達の胸や頭を重く抑へてゐた眼に見えぬ大きな手の払ひのけられましたことは，何物にも換へがたい悦びであります。殊にわれわれ芸術に携はつてゐる者にとりましては，芸術を芸術本来の道に引戻すといふことはつまり歪められ或は喪はれてゐた人間性を取戻すことでありますが一絶好の機会を与へられたことでありまして，この上なき悦びを覚えるとともに，一方また重大な責務を感ずるのであります。敗戦の決定的な原因が，わが文化の低弱にあつたことは勿論でありますが，日本がかうした馬鹿らしい戦争にまきこまれた

こと自体が既に，われわれの文化の貧困さを物語つてゐると思ひます。かうした厳然たる事実に直面しては，いやしくも文化人と言はれる者である以上，今自分達の置かれてゐる世界がいかに頽廃や無秩序のそれであらうと，いやそれだけに一層，自分達に与へられた使命を真剣に遂行しなければならないと存じます。

私達がこのたび『芸術』なる季刊誌を計画しましたことも，さうした使命の一端を果すことにもならうかと思つたからに外ならないのであります。『芸術』は芸術の総合誌を企画してゐるものでありまして，従来稍々もすれば芸術の各分野，例へば文学，美術，音楽などが互ひの連繋を失つて孤立のかたちにありましたものを，何とかして相互の刺激，交流を図つて，芸術の健全な発達を促進したいといふ秘やかな念願を抱いてゐるものであります。編輯の任にあたります者は全然かうした仕事には未経験でありまして，内心深く不安と恐怖を覚えて居りますが，幸ひ皆様の御好意ある御鞭撻を賜らばこの上なき悦びに存じます。一言御挨拶を申述べ，今後の御援助を切にお願ひ申上げます。

敬具

昭和二十一年一月

『芸術』編集責任者　新庄嘉章

大智喜久一

発行者　八雲書店　中村梧一郎

浅井真男様

〈解説〉

八雲書店から刊行された『芸術』の執筆依頼として浅井真男に寄せられた文章の翻刻。封筒一点と書状二点からなる。封筒の表書きには，「神奈川県葉山久留和一六五七　浅井真男様」，消印は切り取られているが，書面から 1946（昭和 21）年 1 月 17 日前後の書簡であることが分かる。裏書きには「東京都杉並区阿佐谷三丁目五一一番地株式会社　八雲書店電話荻窪三六二五番」のスタンプがあり，「新庄嘉章」の名が添えられている。翻刻した書状は，活版印刷で「浅井真男様」の部分のみ手書きとなっている。書状のもう 1 点は，『芸術』編集長新庄嘉章からの手紙である。手紙には，挨拶とともに「研究でもエッセイでも，約二十枚位のもの来月十日位までにいかがですか？」と具体的な執筆依頼がなされている。

差出人の新庄嘉章（1904–1997）は，フランス文学者であり，ジッド「狭き門」，ロマン＝ロラン「ジャン・クリストフ」の翻訳で知られる。早稲田大学仏文科を卒業し，1932 年に早稲田高等学院講師となる。浅井は新庄の 3 年後に講師となっていることから，その頃に親交が結ばれたと考えられる。

『芸術』は，1946 年 7 月 10 日に八雲書店から季刊雑誌として創刊，13 冊を刊行し 1949 年 1 月 1 日に終刊となる。実際に，創刊号巻頭の論文特集「知識人の道」には浅井真男「混迷と憧憬」が掲

載され，戦中からの連続性のもとに戦後を捉える必要性が論じられている。他創刊号執筆者には岩上順一，青野季吉，会津八一，渡邊一夫，三好達治，丹羽文雄，太宰治など。本資料は，戦後の文学復興の一つを担ったと一定の評価が与えられている雑誌『芸術』の創刊に際しての動きをうかがうことができる資料であると言えよう。

（翻刻・解説　中野綾子）

椎名麟三書簡（図 8）

〈本文翻刻〉
1950 年 1 月 27 日　［推定］
神奈川県葉山局区内久留和　浅井真男様
東京都世田谷区松原町三の八九二　椎名麟三

思ひかけなく，ありがたいお言葉をいただき，あつくお礼申上げます。浅井さんからは，ずつと昔から，ニーチエに関し，お教へをいただいて来て居ります。このことについても，この機会にお礼を申述べさせていただきたいと存じます。
「この作家は，どこまで誠実に苦しみ得るか。」といふお言葉は，ことに嬉しく拝読いたしました。と申しますのは，いつも僕を襲ひますのは，お言葉の問ひにほかならないからでございます。僕の誠実といふのは，単なる馬鹿正直ではないのであらうか，そして自分がこの世のなかについて感ずる苦しみは，単なる誤解ではないのであらうか，それよりも一体自分に苦しみ得る能力があるだらうか，などといふ問ひなのであります。その問ひに対する答へは，どうしても完璧に否定的なのであります。この答へに於て，僕の人間としての限界を感じます。そしてこの限界を余り問題にしますので，反動作家として攻撃されるのです。しかもその攻撃は実に正しいのであります。
　ただ，僕の貧しい，くだらない苦労にみちた体験から，つまり体験認識的に申上げますれば，日本の貧民は，（大衆の大部分と云つていゝかも知れません。）ヤスパースのいふ「限界状況」にあります。それが他の文明國（と申しましても，実際に見たわけではありませんが，）の大衆とちがふ点ではないかと思ひます。いかがなものでせうか。彼らの卑屈や詐術は，この彼等の「限界状況」の理解なしには，理解されないのではないのでせうか。たとへば政治に関しても，政治は彼等を欺き了せるでせうが，政治が彼等を欺きおほせたと信じられたとき，実は，彼等は政治を欺いてゐるのです。また彼等を一つの思想へ，一つの組織へ動員することが出来るでせう。しかし彼等は，組織化されたとき，より強烈に，絶対に組織化され得ないものを現すのです。それは，彼等のエゴイズムとしてなのであります。――何故，はじめての方にこんな例を持出して長つたらしく申上げたかと申上げますと，実は，僕もこのやうな大衆のひとりに過ぎないからであります。「個別者を破壊し，個別者を擔ふ者」といふお言葉は，このやう（ママ）大衆のひとりとしての個別者とおとり下さいま

したら，実にありがたいと存じます。と申しますのは，実は自分が，このやうな大衆のひとりであることを心から憎んでゐるからであります。
一昨年の十月から昨年の十月ごろまで，約一年余，雑誌の執筆をおことはりして，御高評たまはりました「その日まで」を書きましたが，――その構想にその時日の半ばを費しました。――苦労と作品の数果は，反比例してしまひ，不満足に思つてゐます。おかげで，生活の上にも窮迫し，現在雑誌に書かねばならぬ仕儀となつてしまひました。生活に苦しい余り，雑誌社に前借をしてしまひましたので。新年号の作品，（二つ）と今書けないで苦しんでゐる群像（しかも締切を，十日もすぎてゐるのです。）は，その借金のかたなのです。つくづく日本に生きてゐることが情なくなりますが，この日本から逃げ出すことは，僕には出来ないのです。事実的にも，自分の運命としても。――
いろいろくだらないことを書きつらねました。お礼が遅れましたのは，群像の仕事に苦んでゐるためではなく，こはい先生に対して感ずるやうな，あの気重さからであります。つまり何を云つても，叱られるだらうと感ずる卑屈な気重さからであります。どうか，お礼状のおくれましたことを，お許し下さい。そしてお暇のとき，拝眉の栄を與へて下さいますならば，幸甚と存じます。ほんとにありがとうございました。思つたより暖い冬ですが，風邪だけは，いつもの通り流行してゐるやうです。どうかお身体を大切に。
一月二十二日
　椎名麟三
浅井真男様

〈解説〉

椎名麟三から浅井真男に宛てられた文章の翻刻。封筒一点と原稿用紙二枚からなる。封筒の表書きには「神奈川県葉山局区内久留和　浅井真男様」と記されており，裏面には「東京都世田谷区松原町三の八九二　椎名麟三」とある。消印が潰れていて判読しづらい（□5・1・27）が，『その日まで』[8] 執筆後であるという文章内の記述から書簡の年次を 1950（昭和 25）年 1 月 22 日に書かれたものと推定できる。文章に書かれた椎名の「大衆のひとりであることを心から憎んでゐる」という意識は，『希望』（『別冊文芸春秋』1949 年 12 月）における三郎の「俺は，自分が無知な大衆であることを心から憎んでいるからなんだ」という表現と一致する。

椎名麟三（1911–1973）は小説家。宇治川電気電鉄部（現・山陽電気鉄道）の車掌時代に日本共産党に入党し，1931 年に検挙される。未決勾留中に読んだニーチェや，ドストエフスキーに影響を受ける。『展望』に発表した『深夜の酒宴』（1947 年 2 月）をはじめとする諸作品によって実存主義を基調とする戦後文学の代表とみなされるようになった。1950 年には日本基督教団上原教会で洗礼を受けている。

文章冒頭には椎名がニーチェに関して浅井から示唆を受けていることが書かれている。本資料か

らは，そうした「こはい先生」としての浅井と椎名の交流関係や，ヤスパースの「限界状況」になぞらえられた椎名における日本の大衆観についてうかがうことができる。

椎名から浅井に宛てた書簡は本資料を含め三点あり，封筒状のものが二点（内一点が翻刻資料），はがきが一点である。封筒のものは原稿用紙二枚分の文章が含まれており，執筆中の書き下ろし長編の意図について書かれている。消印が切り取られているため，書面から 9 月 17 日に書かれたことのみわかる。はがきについても，消印が潰れているため月が分からないが（25・□・3）1950 年の 3 日に書かれている。椎名が脳溢血で倒れた後の様子を浅井に報告する内容となっている。

（翻刻・解説　柿原和宏）

「歌舞伎放談」

〈解説〉

「歌舞伎放談」は，雑誌『心』（平凡社）に 1978（昭和 53）年 3 月から 1981 年 4 月までに全 11 回掲載された。この時，浅井はすでに早稲田大学を定年退職しているが，ドイツ文学者の経歴からは異色な作物といえる。なお，第 8 回（1979 年 9 月）と第 9 回（1981 年 2 月）に 1 年以上の中断があるが，「グロイター版『ニーチェ全集』が急に出版の運びとなった」（「歌舞伎放談（九）」）ため，それに忙殺され執筆できなかったとしている。

浅井は，「昭和四十年の少し前あたりにふとした機会でまず延若（三世實川延若―引用者注，以下同じ），続いて扇雀（現四代目坂田藤十郎），芝翫（七世中村芝翫）を発見して愕然とした」（「歌舞伎放談（一）」）といい，しばらく足が遠のいていた歌舞伎に 60 歳を過ぎて改めて通うようになった。それから 10 年あまりの蓄積を経て，「最近五年間ほどは，世評（とりわけ新聞の劇評）はあまりにも興行会社と国家の与えた位階秩序に合わせすぎている」，また「演目と配役が，（その内幕は私の関知するところではないが）腹立たしいほどにでたらめなので，それを見究めるために」観劇し，手始めに 1975（昭和 50）年 4 月の『中央公論』に「延若讃」を書き，さらに「若い世代に訴えかけるには単なる一過的な劇評では無力である」と思い立ち「歌舞伎放談」を執筆した。

その内容は，歌舞伎の中で浅井が所作事（舞踊）以外で唯一価値を見いだす院本物にのみ焦点を絞り，「根本的に浄瑠璃と歌舞伎の関係を実演に即して論じ」た。つまり，原作と現行の台本を照らし合わせ，原作に重きを置く浅井が所見を述べたものである。「歌舞伎放談」は，近松門左衛門の『冥途の飛脚』『女殺油地獄』，そして浄瑠璃の中でも屈指の名作といわれる『仮名手本忠臣蔵』『義経千本桜』を解説する。ときには役者の演じ方，興行会社の狂言立てや配役，劇評家の指摘に対する辛辣な批評を織り交ぜながら，とくに原作の初演時期やその背景，その後の改作に至るまで，作品の歴史を紐解き，精細に現在の歌舞伎台本との比較を行っている。その多くが實川延若を中心に語られるが，それはすでに「延若讃」を書いているように，浅井自身が延若を最も評価しているからだろう。「歌舞伎放談」の第 9 回から最終第 11 回では，「延若十二曲」を設定するほどの凝り

ようである。

三世實川延若（1921–1991）は河内屋の御曹司として，上方歌舞伎を継承した数少ない俳優であったが，晩年は東京を中心とする歌舞伎界で，その実力を十分に発揮できなかったとされる。それゆえに院本物を演じる全盛期の延若を詳細に記録した「歌舞伎放談」は，今日では正統な上方歌舞伎を知る上で貴重な資料といえる。

（解説　坂下智昭）

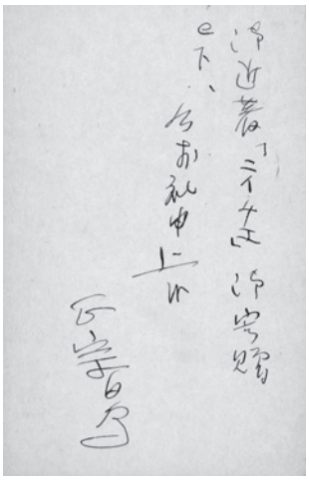

図1

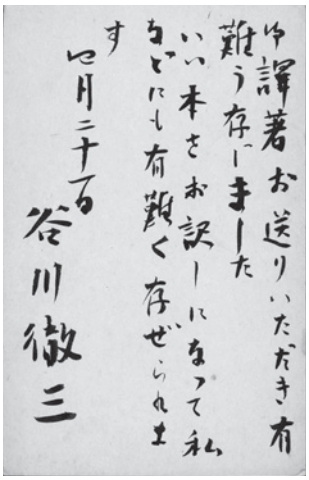

図2

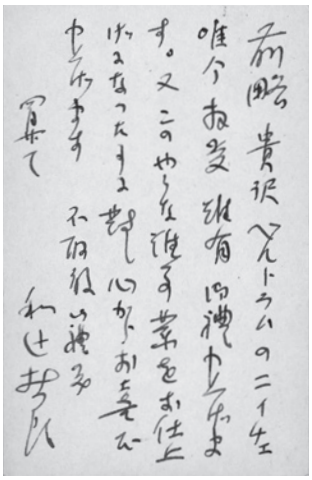

図3

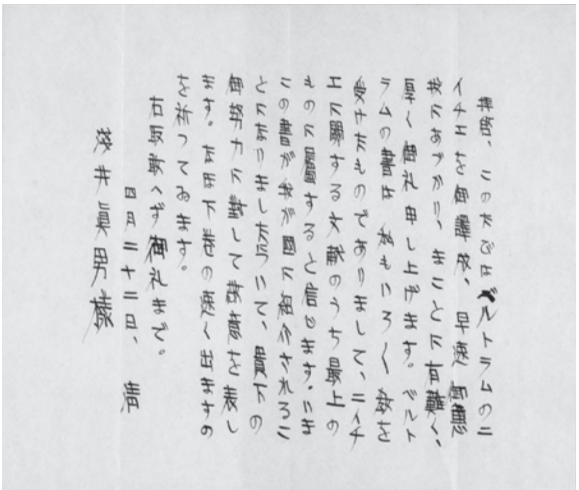

図4

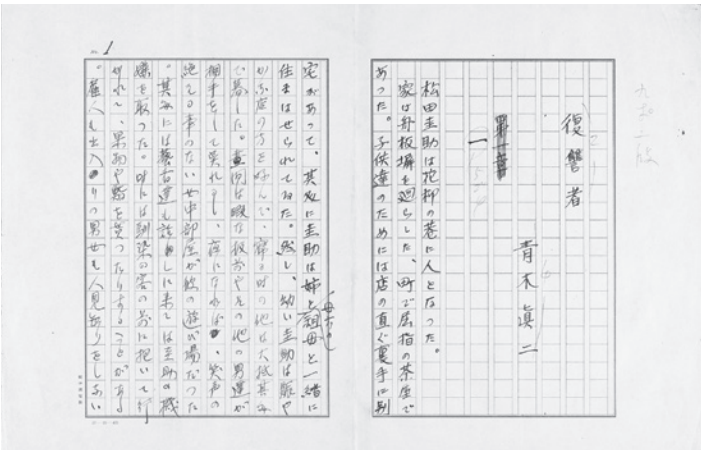

図 5

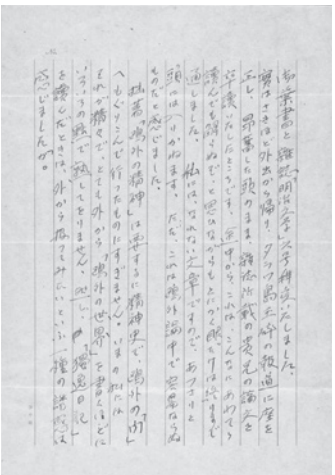

図 6a

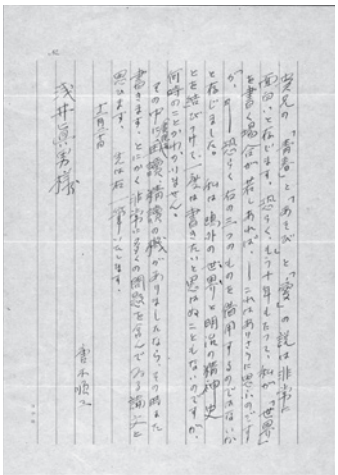

図 6b

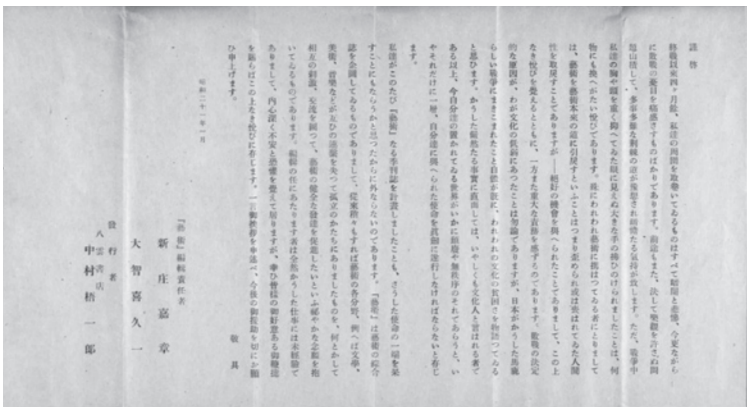

図 7

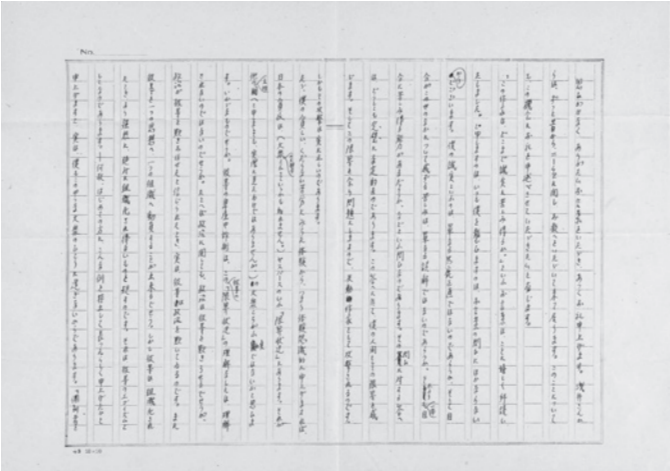

図 8a

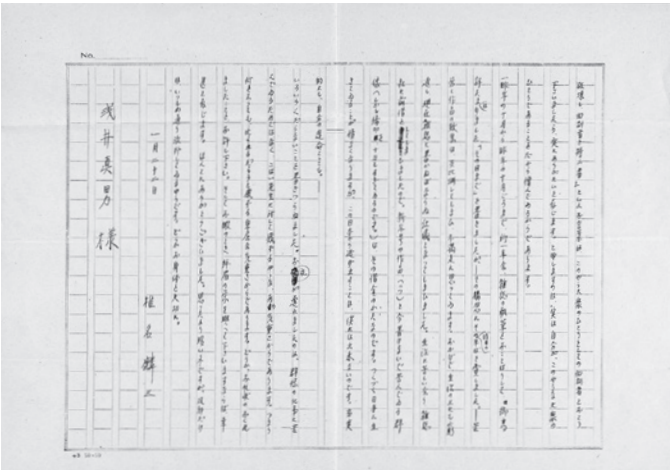

図 8b

［注］

1 和田敦彦『読書の歴史を問う』（笠間書院，2014 年 7 月）217 頁。

2 図書館連携調査グループ「早稲田大学図書館所蔵田口卯吉関係資料目録」（『早稲田大学教育学部学術研究　国語・国文学編』58 号，2010 年 2 月）。

3 リテラシー史研究会データベース（http://www.f.waseda.jp/a-wada/literacy/database.html）。

4 エルンスト・ベルトラム『ニイチェ　一神話の試み　上巻』（浅井真男訳，木村書店，1935 年 4 月）。

5 浅井真男「鷗外の世界」（『明治文学』第 6 号，1938 年 12 月）。

6 唐木順三『森鷗外』（世界評論社，1949 年 4 月）。

7 唐木順三『現代史への試み』（筑摩書房，1949 年 3 月）。

8 椎名麟三『その日まで』は，雑誌『展望』1949 年 6 月号に第一章から第二章，同誌の 7 月号に第三章が発表されたのち，第六章までの書き下ろしを加えて筑摩書房から 1949 年 11 月に刊行された。

3　浅井真男関係資料目録

〈凡例〉

資料形態は「状」「堅冊」「綴り」「袋」に分けた。「刊写」項目は印刷物を「刊」，手書きのものを「写」とし，ゲラのように印刷物に書き入れがなされている場合には「刊／写」とした。タイトルで，目録作成者が説明を付している際には（　）付きで表記することとした。葉書の束については一定の期間でまとまった束を１点としてとり，年幅と，そこに含まれる作成者名を若干名記載する形をとった。

箱番号	番号	枝番号	形態	刊写	数量	タイトル	作成者	受取人	作成年月日	年幅	備考
1	1	1	綴	刊	16	（『ドゥイノー悲歌』校正原稿）	浅井真男	不明	99991207		まえがき.2–5.7–10章.補遺1
1	1	2	袋	写	1	筑摩書房書簡	筑摩書房	大澤實	19290121		
1	2	1	綴	写	1	『職匠と芸術家』草稿	浅井真男	不明	不明		第1章「メーロヴィング王朝とカーロリング王朝」第2章「カルル大帝」
1	2	2	袋	写	4	（封筒）	不明	不明	不明		
1	3	1	袋／状	写	3	野口雄二書簡	野口雄二	浅井真男	不明		
1	3	2	袋／綴	写	2	白水社書簡	白水社	浅井真男	19820812		『道徳の系譜』解説
1	3	3	綴	写	1	（『ニーチェ全集第7巻』草稿）	浅井真男	不明	不明		
1	3	4	綴	写	1	ニーチェ全集（第2期）全巻内容	浅井真男	不明	不明		
1	4		綴	写	1	（『孤独なるニーチェ』草稿）	浅井真男	不明	不明		11章から13章まで
1	5		綴	写	1	（『孤独なるニーチェ』草稿）	浅井真男	不明	不明		序言から3章
1	6		綴	写	7	（『ニーチェ全集第7巻』草稿）	浅井真男	不明	不明		「第2部　漂泊者とその影」
1	7	1	状	写／刊	1	原稿執筆依頼書	東海大学出版会／木下正之	浅井真男	19790117		
1	7	2	状	写	1	木下正之書簡	東海大学出版会／木下正之	浅井真男	19790213		
1	7	3	状	写	1	木下正之書簡	東海大学出版会／木下正之	浅井真男	99990111		
1	7	4	綴	写	1	浅井真男著作計画書	不明	不明	不明		表題に「（仮題）『宗教感情とその芸術的表現』或は『畏敬と芸術』」
1	7	5	綴	写	1	（『職匠と芸術家』草稿）	浅井真男	不明	不明		表紙に「旧（廃棄）　序章」／序章「ヨーロッパ芸術巡礼」
1	9	1	綴	写	1	（『孤独なるニーチェ』草稿）	浅井真男	不明	不明		26–28章
1	9	2	状	刊	19	（原本図版）	浅井真男	不明	不明		手書きによる翻訳付き
1	10		綴	写	1	（『孤独なるニーチェ』草稿）	浅井真男	不明	不明		8–10章
1	11		綴	写	5	（『孤独なるニーチェ』校正原稿）	浅井真男	不明	不明		4章～7章
1	12	1	綴	写	16	（『ニーチェの生涯』用語例，判例）	浅井真男	不明	不明		
1	12	2	状	刊	2	（「深まるニーチェ研究」書評）	西尾幹二	不明	19831121		『ニーチェの生涯』関連書評
1	12	3	状	刊	1	（「再評価をうながす新訳」書評）	清水本裕	不明	19831205		『ニーチェの生涯』関連書評
1	12	4	状	刊	2	（「イデオロギーにとらわれず過去を見る時機に」書評）	西尾幹二	不明	19831223		『ニーチェの生涯』関連書評
1	12	5	綴	刊	1	朝日ジャーナル	高瀬昭治	不明	19831223		P49–51「イデオロギーにとらわれず過去を見る時機に」
1	13		綴	写	5	（『ニーチェ全集第七巻』草稿）	浅井真男	不明	不明		第2部
1	14		綴	写	1	（『孤独なるニーチェ』草稿）	浅井真男	不明	不明		24章～25章
1	15		綴	写	6	（『孤独なるニーチェ』草稿）	浅井真男	不明	不明		14章～18章
1	16		綴	写	1	（『職匠と芸術家』草稿）	浅井真男	不明	不明		125枚＋4枚
1	17		綴	写	1	（『職匠と芸術家』草稿）	浅井真男	不明	不明		

箱番号	番号	枝番号	形態	刊写	数量	タイトル	作成者	受取人	作成年月日	年幅	備考
1	18		綴	写	6	（『孤独なるニーチェ』草稿）「二一章　友情」草稿	浅井真男	不明	不明		「21章　友情」
1	19	1	綴	刊	1	（『職匠と芸術家　宗教感情とその形態』校正原稿）	浅井真男	不明	19731299	1973–1974	雑誌『海』掲載分コピー
1	19	2	綴	刊	4	（『職匠と芸術家　宗教感情とその形態』校正原稿）	浅井真男	不明	不明		東海大出版会刊行予定／第1回訂正済み定稿
1	19	3	綴	写	3	（「ミケランジェロのピエタ像」草稿）	浅井真男	不明	不明		
1	19	4	状	写	1	（メモ）	浅井真男	不明	不明		
2	20		綴	写	5	（『孤独なるニーチェ』草稿）	浅井真男	不明	不明		「第4部　孤独の魂」
2	21		綴	刊	12	職匠と芸術家	浅井真男	不明	不明		刊行物のコピー
2	22	1	袋	刊	1	（履歴書封筒）	浅井真男	不明	19429999		
2	22	2	綴	写	1	（戸籍謄本）	東京府	浅井真男	19429999		
2	22	3	状	写	1	履歴書	浅井真男	不明	19429999		
2	22	4	状	写	2	江間道助書簡	江間道助	浅井真男	19340710		
2	23	1	袋／状	写	6	1961–1968年書簡	Karl Heinz/D. G. Friedrich/katsuhiko Naito/その他	浅井真男	19610107	1961–1968	
2	23	2	袋／状	刊／写	2	1970–1971書簡	Margarete Steuber	浅井真男	19791214	1970–1971	
2	23	3	袋／状	刊／写	2	1983–1985年書簡	Ruth Friedrich/Margarete Steuber	浅井真男	19830809	1983–1985	
2	24		状	写	9	1963–1977年書簡	鈴木和子／Mitsuyuki Natsumeda/Abs. H.Yamada/その他	浅井真男	19631213	1963–1977	
2	25	1	状	写	9	1959–1967年書簡	朝日英夫／中村浩三／中村京子／その他	浅井真男	19591018	1959–1967	
2	25	2	状	写	44	1968–1978年書簡	平野具男／今井寛／野中成夫／その他	浅井真男	19680301	1968–1978	
2	25	3	状	写	7	1983–1986書簡	松代洋一／西尾幹二／野中成夫	浅井真男	19830412	1983–1986	
2	26	1	袋／状	写	34	1963–1972年書簡	土井道子／松本富士男／大城功／その他	浅井真男	19630809	1963–1972	
2	26	2	袋	写	3	1944–1953年書簡	土井道子／伊福部蕗子／松宝専治	浅井真男	19441219	1944–1953	
2	26	3	袋	写	1	川村二郎書簡	川村二郎	浅井真男	19300727		
2	26	4	袋	写	7	1977–1986年書簡	手塚耕哉／登張正実／三好由紀彦／その他	浅井真男	19770608	1977–1986	
2	27		状	写	67	1953–1957年書簡	手塚富雄／下店静市／土井送子／その他	浅井真男	19530316	1953–1957	
2	28		袋／状	写	51	1954–1957年書簡	浅井恵倫／土井道子／中村浩三／その他	浅井真男	19540403		
2	29	1	状	写	1	大久保進書簡	大久保進	浅井真男	19700812		
2	29	2	状	写	3	1977–1982年書簡	中村記二郎／高橋英夫／長瀬健一	浅井真男	19770226	1977–1982	
2	30	1	状	写	42	1933–1934年書簡	大木健一郎，金子八郎，米田順三／その他	浅井真男	19330108	1933–1934	
2	30	2	状	写	2	1955年書簡	大木健一郎，小島純郎	浅井真男	19551019	1955	
2	31	1	袋／状	写	22	1934年書簡	金尓八郎／野中正夫／木村有隣堂書店／その他	浅井真男	19340520	1934	消印が切り取られているため，年度推定多し
2	31	2	袋／状	写	1	大塚里美書簡	大塚里美	浅井真男	19471218	1947	
2	31	3	状	刊	1	（浦上五三郎教授見舞金申込書）	岡田幸一	浅井真男	19551107	1955	
2	31	4	状	写	1	（「巻頭言」草稿）	不明	浅井真男	不明		
	32		袋／状	写	48	1935–1942年書簡	谷崎精二／加藤アヤノ／原田実	浅井真男	19350426	1935–1942	
2	33	1	袋／状	写	4	1963–1967年書簡	鈴木達哉／川北洋太郎／松代洋一／その他	浅井真男	19630413	1963–1967	

箱番号	番号	枝番号	形態	刊写	数量	タイトル	作成者	受取人	作成年月日	年幅	備考
2	33	2	袋/状	写	5	1977-1978年書簡	薗田宗人/石田明文/大谷洛峰/その他	浅井真男	19770426	1977-1978	
2	34		袋/状	写	30	1935-1941年書簡	大学書林/改造社『文藝』編集部/木村書店/その他	浅井真男	19350219	1935-1941	年月日推定
2	35	1	状	写	22	1965-1975年書簡	川村二郎/松代洋一/野中威夫/その他	浅井真男	19650225	1965-1975	
2	35	2	状	写	14	1976-1981年書簡	澤田洋一/白水社 関川幹郎/山本定雄/その他	浅井真男	19760506	1976-1981	年度推定あり
2	36	1	袋/状	写	22	1965-1975年書簡	赤堀武雄/武内あや子/山本定祐/その他	浅井真男	19650524	1965-1975	
2	36	2	袋/状	写	9	1976-1985年書簡	中村睦子/古川いつ子/深井康夫/その他	浅井真男	19761110	1976-1985	
2	37	1	袋/状	写	19	1949-1955年書簡	伊藤友之/沢田俊一/福田賢司/その他	浅井真男	19490411	1949-1955	
2	37	2	袋/綴	写	2	中野睦子書簡	中野睦子	浅井真男	19640406		
2	37	3	袋/綴	写	2	近松座事務所書簡	近松座事務所	浅井真男	19860815		
2	37	4	状	写	1	（領収書）	角川書店	浅井真男	19550407		
2	38	1	状	写	48	1944-1953年書簡	楢崎勤/舟木重信/小口優	浅井真男	19440912	1944-1952	
2	38	2	状	写	6	1934-1943年書簡	山崎八郎/浅井恵倫/斉賀由一	浅井真男	19340331	1934-1943	
2	39	1	状	写	22	1952-1955年書簡	土井道子/秋山清子/川北洋太郎/その他	浅井真男	19521207	1952-1955	
2	39	2	状	写	4	1962-1963年書簡	角川書店/矢崎次郎/杉本一雄/その他	浅井真男	19621111	1962-1963	
2	40	1	袋/状	写	4	山田広明書簡	山田広明	浅井真男	19550230		
2	40	2	袋/状		4	麻生毅書簡	麻生毅	浅井真男	19530506		
2	40	3	袋/状		2	佐藤政人書簡	佐藤政人	浅井真男	19550427		
2	40	4	袋/状		8	中村睦子書簡	中村睦子	浅井真男	99991205		
2	40	5	袋/状		4	平石英雄書簡	平石英雄	浅井真男	99990216		
2	40	6	袋/状		5	（メモ書き）	吉倉伸/浅井真男/寺坂孝雄	不明	不明		
2	41		状	写	24	1946-1951年書簡	佐藤晃一，舟木重信，川北洋太郎／その他	浅井真男	19460306	1946-1951	
2	42	1	袋/状	写	23	1947-1953年書簡	新文学編集部/土屋実/川北洋太郎	浅井真男	19370314	1947-1953	
2	42	2	袋/状	写	1	土井道子書簡	土井道子	浅井真男	19670221		
2	42	3	状	写	97	1957-1963年書簡	武内あや子/土井道子/佐藤晃一	浅井真男	19570510	1957-1963	
2	43		状	写	52	1948-1954年書簡	川村二郎／野島正城／相良守峯／その他	浅井真男	19480116	1948-1954	
2	44		袋/状	写	29	1958-1964年書簡	平凡社/近藤英夫/筑摩書房/その他	浅井真男	19580621	1958-1964	年度推定あり
2	45	1	状	写	12	1962-1970年書簡	野中威夫/川北洋太郎/長谷部清衛/その他	浅井真男	19621126	1962-1970	
2	45	2	状	写	6	1979-1982年書簡	中村詔二郎/T.Nakamura/手塚耕哉/その他	浅井真男	19791121	1979-1982	
2	46	1	状	写	19	1965-1975年書簡	板垣鷹穂／近藤英夫／伊福部露子／その他	浅井真男	19650409	1965-1975	
2	46	2	状	写	5	1976-1981年書簡	丸山武夫／立川昭二／澤田俊一／その他	浅井真男	19761024	1976-1981	
2	47	1	状	写	1	（唐木順三宛書簡草稿）	浅井真男	唐木順三	不明		

箱番号	番号	枝番号	形態	刊写	数量	タイトル	作成者	受取人	作成年月日	年幅	備考
2	47	2	状	写	1	ゲーテ書房書簡	ゲーテ書房	浅井真男	不明		
2	48	1	状	写	1	E.Shimo misse書簡	E.Shimo misse	浅井真男	19641224		
2	48	2	状	写	1	中村皓光書簡	中村皓光	浅井真男	不明		
2	48	3	袋/状	写	6	1975-1978年書簡	Mary Loveless/横田忍	浅井真男	19751230	1975-1978	
2	48	4	袋/状	写	7	1980年書簡	Susanne Hartwieg/Margarete Steuber	浅井真男	19800402		
2	49		綴	写	1	（翻訳メモ書き）	浅井真男	不明	不明		
2	50		袋/状	写	59	1946-1950年書簡	川北洋太郎/日本評論社/筑摩書房/その他	浅井真男	19460703	1946-1950	
3	51	1	状	写	3	1978-1982年書簡	加藤隆・寛子/米村順子/仲手川良雄	浅井真男	19781218	1978-1982	
3	51	2	状	写	1	野中隆夫書簡	野中隆夫・あい	浅井富美子	19780427		
3	52		袋/状	写	5	1966-1969年書簡	土井道子/入野田真右/小島公一郎/その他	浅井真男	19660220	1966-1969	
3	53	1	状	写	17	1959-1966年書簡	丸山武夫/岡田珠子/北村陽子	浅井真男	19591219	1959-1966	
3	53	2	状	写	1	吉田多吉書簡	吉田多吉	浅井真男	19500719		
3	53	3	状	写	1	不明書簡	不明	浅井真男	19331016		真正大疑現前底の機を追ふ者，と署名
3	54		状	写	15	1966-1971年書簡	丸山武夫/松本富士男/伊福部蕗子	浅井真男	19660818		
3	55	1	状	写	1	y.kitaura書簡	y.kitaura	浅井真男	不明		
3	55	2	状	写	1	中村皓光書簡	中村皓光	浅井真男	不明		
3	55	3	状	写	7	1976-1986年書簡	芦津丈夫/大久保進/五十嵐蕗子	浅井真男	19770403	1976-1986	
3	56	1	袋	写	5	1971-1979年書簡	清浦康子/森祐子/D.G.Friedrich/その他	浅井真男	19710115	1971-1979	
3	56	2	袋	写	1	Hiroshi Tomuro書簡	HiroshiTomuro	浅井真男	19660810		
3	56	3	袋	写	4	1981-1984年書簡	MotoyukiOkada/MargareteSteuber/	浅井真男	19811215	1981-1984	
3	57	1	袋/状	写	14	1968-1978年書簡	好村冨士彦/五十嵐蕗子/松本富士男/その他	浅井真男	19680624	1968-1978	
3	57	2	袋/状	写	9	1979-1985年書簡	武智鉄二/塩見鮮一郎/松代洋一/その他	浅井真男	19790208	1979-1985	年月日推定含む
3	58		袋/状	写	56	1962-1970年書簡	野中成人/志波一富/土井道子	浅井真男	19620917	1962-1970	
3	59		状	写	201	1952-1957年書簡	唐木順三/谷崎精二/佐藤晃一/その他	浅井真男	19520311	1952-1957	
3	60		袋/状	写	73	1951-1957年書簡	平井秀生/新庄嘉章/山本信枝/その他	浅井真男	19511221	1951-1957	年月日推定含む
3	61	1	状	写	1	Yoshimmu Sugiyama書簡	Yoshimu Sugiyama	浅井真男	19599999		
3	61	2	袋	写	3	仲手川良雄書簡	仲手川良雄	浅井真男	不明		
3	61	3	袋	写	2	クリスマスカード	浅井真男/浅井富美子	不明	19891217		
3	62	1	状	写	2	1960-1968年書簡	m.natsumeda/塩見生	浅井真男	19600625	1960-1968	
3	62	2	状	写	1	Eiichi Shimomisse書簡	Eiichi Shimomisse	浅井真男	不明		
3	62	3	状	写	2	1958-1959年書簡	Eiichi Shimomisse・Y.Oshima	浅井真男	19581210	1958-1959	
3	62	4	状	写	1	H.Yamazaki書簡	H.Yamazaki	浅井真男	不明		
3	63	1	袋/状	写/刊	1	八雲書店書簡	八雲書店	浅井真男	19460199		
3	63	2	袋/状	写	28	1958-1963年書簡	中村洋酒店/丸山武夫/早稲田大学第二文学部/その他	浅井真男	19580217	1958-1963	年度推定あり

箱番号	番号	枝番号	形態	刊写	数量	タイトル	作成者	受取人	作成年月日	年幅	備考
3	64		状	写	90	1957–1962年書簡	武内あやこ／加藤国夫／佐藤晃一／その他	浅井真男	19570510	1957–1962	
3	65		状	写	2	1963年書簡	中村皓光／中村八重	浅井真男浅井富美子	19630507		
3	65		袋／状	写	3	実支晴夫書簡	実支晴夫	浅井真男	19631012		
3	66		状	写	13	1965–1966年書簡	武内あやこ／宮原朗／小島純郎／その他	浅井真男／富美子	19650409	1965–1966	
3	67	1	状	写	1	Kazuo Suzuki書簡	Kazuo Suzuki	浅井真男	19650522		
3	67	2	状	写	1	古川いつ子書簡	古川いつ子	浅井真男	不明		
3	68	1	袋／状	写	6	1966–1967年書簡	Karl Heinz	浅井真男	19660103	1966–1967	
3	68	2	袋／状	写	2	Yoshiimu Sugiyama書簡	Yoshimu Sugiyama	浅井真男	19831203		
3	68	3	袋／状	写	9	岡田素之書簡	岡田素之	浅井真男	19830722		浅井真男の写真有
3	69	1	状	刊	1	こった日本語を使う佐藤訳	不明	不明	19550507		ニイチェ「ツァラトゥストラ」書評／『図書新聞』
3	69	2	状	刊	1	図書新聞	図書新聞社	不明	19550115		
3	69	3	状	刊	1	解釈者の感受と論理の手堅さ	浅井真男	不明	19580217		リルケ「ドゥイノの悲歌」（手塚富雄訳）書評／『日本読書新聞』
3	69	4	状	刊	2	無時間的な人間存在の秘密	浅井真男	不明	19560618		トーマス・マン「ヨゼフとその兄弟」（高橋義孝訳）書評／『日本読書新聞』
3	69	5	状	刊	1	自由に対する愚弄と絶望	浅井真男	不明	19520929		サルトル「自由への道」（佐藤朔　白井浩二訳）書評／『日本読書新聞』
3	69	6	状	刊	1	消えることのない影響	浅井真男	不明	19650906		『富山新聞』
3	69	7	状	刊	1	あらゆる生命への畏敬	浅井真男	不明	19531109		『日本読書新聞』
3	69	8	状	刊	1	解釈過剰を避ける	不明	不明	19551008		リルケ「マルテの手記」書評／『図書新聞』
3	69	9	状	刊	1	書簡による人間像の浮彫	浅井真男	不明	19531019		秋山英夫「人間ニーチェ」書評／『日本読書新聞』
3	69	10	状	刊	1	海のように“そこに在る”	浅井真男	不明	19580120		『日本読書新聞』
3	69	11	状	刊	1	ヨーロッパ精神を担う	浅井真男	不明	19550822		『日本読書新聞』
3	70	1	綴	刊	1	思索と思惟の対話	浅井真男	不明	19550516		ハイデッガー著ヘルダーリンの詩書評／日本読書新聞
3	70	2	綴	刊	2	解釈で補ってはいない	長谷川四郎	不明	19550212		図書新聞
3	70	3	綴	刊	1	文化ということ	浅井真男	不明	19691219		毎日新聞
3	70	4	綴	刊	1	自由に対する愚弄と絶望	浅井真男	不明	19520929		『自由への道』書評／日本読書新聞
3	70	5	綴	刊	1	書簡による人間像の浮彫	浅井真男	不明	19531019		秋山英夫『人間ニーチェ』書評／日本読書新聞
3	70	6	綴	刊	1	解釈者の感受と論理の手堅さ	浅井真男	不明	19580217		リルケ著『ドゥイノの悲歌』書評／日本読書新聞
3	70	7	綴	刊	2	卓越した新説が数多く	浅井真男	不明	19770919		西尾幹二著『ニーチェ』書評／週刊読書人
3	71	1	状	刊	1	文化ということ	浅井真男	不明	19691219		『朝日新聞』掲載
3	71	2	状	刊	2	現代小説の危機　カミュ「転落」のもたらしたもの	浅井真男	不明	19570409		『早稲田大学新聞』掲載
3	71	3	状	刊	1	良心的で平明（野村訳）正確，几帳面な浅井訳	保坂宗重	不明	19580125		『水と原生林のはざまで』の書評／『図書新聞』掲載
3	71	4	状	刊	1	巨匠たちを浮彫りに	不明	不明	19680403		『音楽と音楽家』の書評／『朝日新聞』掲載
3	71	5	状	刊	1	本格的な研究	属啓成	不明	19611213		『モーツァルト』の書評／『東京新聞』掲載
3	71	6	状	刊	1	マイエル作浅井真男訳『フッテン最後の日日』	舟木重信	不明	19410521		『フッテン最後の日日』の書評／『早稲田大学新聞』掲載
3	71	7	状	刊	1	無関心の罪を指摘	佐藤晃一	不明	19550214		『罪なき人々』書評
3	71	8	状	刊	1	気持ちの悪い小説	武田泰淳	不明	19550205		『罪なき人々』書評

箱番号	番号	枝番号	形態	刊写	数量	タイトル	作成者	受取人	作成年月日	年幅	備考
3	71	9	状	刊	1	政治に無関心な人の罪	不明	不明	19550131		『罪なき人々』の書評／『朝日新聞』掲載
3	71	10	状	刊	1	一個の信仰人として考察	津川主一	不明	19571116		『バッハ・上』の書評／『図書新聞』掲載
3	71	11	状	刊	1	注釈のあるなし　深まったニーチェ理解	吉田輝夫	不明	19660507		『世界文学大系』の書評／『図書新聞』掲載
3	72	1	状	刊	1	堅実で良心的だが……翻訳口調が抜け切らぬ浅井訳	不明	不明	19550507		「トニオグレーガー」の書評／『図書新聞』に掲載
3	72	2	状	刊	2	実存者の苦悩の目	国松孝二	不明	19550117		「罪なき人々」（ヘルマン・ブロッホ）の書評／『日本読書新聞』に掲載
3	72	3	状	刊	1	巨大な翼が羽ばたく	井上正蔵	不明	19690717		「ヘルダーリン全集Ⅰ・Ⅱ」（ヘルダーリン）の書評／『週刊読書人』に掲載
3	72	4	状	刊	1	大波小波	可不可	不明	19690000		「ヘルダーリン全集」の書評／掲載紙不明
3	72	5	状	刊	2	（「ヘルダーリン全集」チラシ・写真）	河出書房	不明	19690000		
3	72	6	状	刊	1	日本翻訳家協会	日本翻訳家協会事務局	不明	19691200		
3	72	7	状	刊	5	深まるニーチェ研究	西尾幹二	不明	19831121		「若きニーチェ」「孤独なるニーチェ」の書評／掲載紙不明
3	72	8	状	刊	1	朝日新聞	朝日新聞社	不明	19790424		
3	72	9	状	刊	1	若きニーチェ	不明	不明	19830925		「若きニーチェ」の書評／『朝日新聞』に掲載
3	72	10	状	刊	1	早稲田大学新聞	早稲田大学新聞	不明	19350619		
3	72	11	状	刊	1	研究者の自己表現	浅井真男	不明	19501025		『日本読書新聞』に掲載
3	72	12	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19501011		
3	72	13	状	刊	1	堂々たるマンの批判	浅井真男	不明	19500816		『図書新聞』に掲載
3	72	14	状	刊	1	ニーチェについて	国松孝二	不明	19500830		「ニーチェ詩集」の書評／『日本読書新聞』に掲載
3	72	15	状	刊	1	名訳・適訳・雅訳	手塚富雄	不明	19510124		「デイオティーマの恋文」の書評／『図書新聞』に掲載
3	72	16	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19510124		
3	73	1	状	刊	1	文学的冒険	浅井真男	不明	19480904		『東京新聞』掲載
3	73	2	状	刊	1	シュティフテル　水晶　浅井真男訳	手塚富雄	不明	19490525		シュティフテル『水晶』浅井真男訳の書評／『日本読書新聞』掲載
3	73	3	状	刊	2	新しいゲーテ詩集二つの訳業“一握り”の花束　「悲しき限界」への困苦と絶望	浅井真男	不明	19491116		『日本読書新聞』掲載
3	73	4	状	刊	1	美術二著	嘉門安雄	不明	19430719		ブルクハルト『ルーベンスの回想』浅井真男訳の書評／『東京新聞』掲載
3	73	5	状	刊	1	リルケを書いた本・リルケの書いた本＝二つの評伝と三冊の詩集＝	富士川英郎	不明	19540417		リルケ『ドゥイノー悲歌』浅井真男訳の書評／『図書新聞』
3	73	6	状	刊	1	全訳と詳解の労作リルケ浅井真男訳『ドゥイノー悲歌』	高安国世	不明	19540426		リルケ『ドゥイノー悲歌』浅井真男訳の書評／『日本読書新聞』
3	73	7	状	刊	1	個人的な関心が多すぎる　シーバー著会津伸訳『シュヴァイツェル―その歩み』	浅井真男	不明	19540201		『産経新聞』掲載
3	73	8	状	刊	1	堂々たるマンの批判　見逃せぬゲオルゲ派の影響	浅井真男	不明	19500826		『図書新聞』掲載
3	73	9	状	刊	1	朝日新聞	朝日新聞社	不明	19581015		
3	73	10	状	刊	1	研究者の自己表現　戦後のニーチェ研究所	浅井真男	不明	19501025		『日本読書新聞』掲載
3	73	11	状	刊	1	執筆者通信　浅野真男	不明	不明	19500830		『日本読書新聞』掲載
3	73	12	状	刊	2	日本人の立場で考えよ　すゝめたい氷上氏の著	浅井真男	不明	19500809		『図書新聞』掲載

箱番号	番号	枝番号	形態	刊写	数量	タイトル	作成者	受取人	作成年月日	年幅	備考
3	73	13	状	刊	1	ニーチェの流行とその解釈　研究者の自己表現戦後ニーチェ研究書	浅井真男	不明	19501025		『日本読書新聞』掲載
3	73	14	状	刊	1	文庫　ゲーテ「ヴィルヘルム・マイス　テルの修業時代」浅野真男訳	不明	不明	19500719		『日本読書新聞』掲載
3	74	1	状	刊	1	誠実な態度・高安訳	浅井真男	不明	19550115		『オルフォイスに捧げるソネット』の書評／『図書新聞』掲載
3	74	2	状	刊	1	均整のある構成　個人の責任はどこから始まるか？	浅井真男	不明	19550723		『愛する時と死する時』の書評
3	74	3	状	刊	1	人間的危機の透察　すべての関係を「純粋連関」の中に置く発言を	浅井真男	不明	19581229		リルケの書評
3	74	4	状	刊	2	恐るべき人間の状態を告発	浅井真男	不明	19550815		『われわれ自身のうちなるヒットラー』書評
3	74	5	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19550509		
3	74	6	状	刊	1	京都新聞	京都新聞社	不明	19580408		
3	74	7	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19550124		
3	74	8	状	刊	1	早稲田大学新聞	早稲田大学新聞会	不明	19571119		
3	74	9	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19550101		
3	74	10	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19541220		
3	74	11	状	刊	1	週間読書人	読書人	不明	19650920		
3	75	1	状	刊	1	生と死と愛の実存的把握	浅井真男	不明	19540616		『早稲田大学新聞』に掲載
3	75	2	状	刊	2	人生の意味を問う	浅井真男	不明	19540308		「流れの背後の市」（ヘルマン・カザック）の書評／『日本読書新聞』に掲載
3	75	3	状	刊	2	芸術と学との融合	浅井真男	不明	19551031		「バッハ」（シュバイツァー）の書評／『日本読書新聞』に掲載
3	75	4	状	刊	1	リルケ晩年の詩境	浅井真男	不明	19540607		「新潮社版「リルケ」選集詩集Ⅱ」の書評『日本読書新聞』に掲載
3	75	5	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19550404		
3	75	6	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19550528		
3	75	7	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19550704		
3	75	8	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19550718		
3	75	9	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19550725		
3	75	10	状	刊	1	図書新聞	図書新聞社	不明	19550813		
3	75	11	状	刊	1	日本読書新聞	日本出版協会	不明	19550815		